

「舞う・舞いあがれ！ひとつになるまで」

足立 龍枝

舞踊家・姜輝鮮（カン・フィソン）さんの訃報を知ったのは、1月14日のメールだった。循環器疾患の薬を飲んでおられるのは知っていたが、1944年泉大津市の生まれだから、まだ72歳。突然のお別れだった。

確かに年賀状を頂いていたと思って探してみた。去年8月の第34回発表会のテーマ「心の舟詩（ふなうた）」のポスターの一部を取り入れ、縮小した年賀状だった。宛名の下半分ほどに「濟州島のコドウンオ クイ（焼き鯖）の香りが漂ってきました。思わずいきたくなりました。先日、ソウルのトソクチョン（土俗村）のサムゲッタン（参鶏湯）を食べました。また、お会いできれば……」。

元気のいい、ハングル交じりの文章に涙がこぼれた。



姜さんの故郷は済州島の南西端・大静邑（テジョンウップ）。日本の植民地から独立した後、お父さんが子どもたちの民族教育に熱心に力を尽くされていたという。直接、姜さんからは聞いていなかったが、葬儀の場や、その後お目にかかった人からいろいろと教えてもらった。もっと姜さんから聞いておくべきだったと悔やまれる。

去年の夏、私が済州島にはまっていることを話すと、とても喜んで、ぜひ、焼き鯖を食べてくださいと言われた。魚の好きな私は、太刀魚はよく食べたが、鯖は初めてだった。

民俗市場のコーナーにあるテント張りの食堂で、中ぐらいの開きの鯖を食べた。翌日も別の店で味比べをしてみた。そのことを絵はがきに書いて、済州の郵便局から送った。それが印象に残っていて、あの年賀状になったのかなと思う。

景福宮（李氏朝鮮時代六百年の王宮）の西側に韓式家屋がそのまま残っている地域に「土俗村（トソクチョン）」というサムゲッタン専門店がある。世紀の舞姫といわれた崔承喜（チェ・スンヒ）の家だったところだが、姜さんは、ソウルに自由に行き来ができる朝鮮籍だったこともあり、チェ・スンヒが住んでいたということは知らなかつた。

10年前、私がチェ・スンヒのことを調べていて、確かに姜さんは、チェ・スンヒの孫弟子にあたる（弟子にあたる人は朝鮮に在住し、その人に指導を受けていた）と、聞いていたので話を聞きに行った。2時間ぐらいの熱弁から、自分が日本でチェ・スンヒの「舞い」を守っていくのだ、チェ・スンヒの築いた朝鮮舞踊の継承に生涯をかけるという決心を感じた。その時に日本人の私が知っていることに驚かれたようだつた。

姜さんは、36年前、1980年に鶴橋に祖国統一のテーマ「舞う、舞い上げれ！ひとつになるまで」を実現するために、「朝鮮舞踊研究所」を設立した。姜さんの友人から紹介してもらった私は、初期の韓流だったかもしれない。舞踊はダメだけれど、打楽器チャンゴなら……と、教えてくれるところを探していたので習うことにした。

鶴橋駅横の縦長6階建て、狭いビルの最上階が教室で、週1回の練習が始まった。チャンゴの1期生は日本人の教員、民族学校の教員など、5～6人のグループだった。

2か月後にピロティホールで第1回発表会があった。舞踊が中心だったが、チャンゴグループも出演することになった。プロの朝鮮歌舞団の演奏・歌に合わせての出演だから、そちらの方が目立つていただろう。韓流のはしりで、見に来てくれた友人グループから花束をもらった思い出がある。

第2回が一番まともだったかな？ 第3回に出演して、1週間に1回とはいえしんどくなってきたので、発表会終了後やめてしまった。練習の帰りにメンバーと駅前の居酒屋で話したことが、私にとって在日韓国・朝鮮人について様々な知識を生で得た貴重な時間だったように思う。

その後、20年ぐらいは年賀状と発表会を見に行くぐらいの付き合いだった。

舞踊研究所は、日本国内はもちろん、海外公演もはじめた。1990年の中国・93年アメリカ・95年ピョンヤン・99年ウズベキスタン・2006年濟州島・7年ソウル……。

そのころ姜さんからこんな話を聞いた。故郷濟州島で、担当職員から、国籍が朝鮮籍だということは言わないようにして欲しいと言われたと。正確な年度は分からぬが、公演のためには仕方がなかつたのだろう、国籍を韓国籍に変えておられた。知らなかつた人の方が多かつたようだ。

私などに、しんどい話をしてもらひながらのだが、去年の発表会の前に少し聞いたことがある。少子化でレッスンに来る子どもが減ってきた事が一番つらいと。何年か前から、玉造駅前の一等地ビルの3階に移転し、レッスン場は広々としていたが、財政面はどうなつていたのだろうか。発表会の前には北朝鮮へ行き、師の指導を受けるというのが余裕のあるころの話だったが、それどころではない去年の発表会。

しかし、心配が吹き飛んだような感動する発表会になった。姜さんの演出だと思うが、研究生・元研究生・保護者の心のこもつた協力を感じることができた。

終わって数日後、電話がかかってきた。「どうでした？」よかったですとしか言葉が見つからないが、当日までどうなるかと不安だった様子を聞いていたので、姜さんの気持ちが伝わってきた。



「今まで以上に『一つになるまで』が成功したと思いますよ」「先生の祖国統一の願いが、充分感じられましたよ」。食糧難時代育ちの姜さんは、食パンが大好きなことを聞いていたので「おいしい食パンを焼いて持つりますね」と話して電話を切った。秋に一回だけ手作りパンを持っていくことができた。

しかし、一つ気になっていたことがあった。高血圧の薬を飲んでいて、足のけがをしたときに、外科へ行ったが、血が止まらなくて……と聞いたことがあったのだ。

今回、訃報を知った時にとっさに循環器関係だと思った。朝食をとり、ソファーに座って飲み物を飲んでいるときに、意識が亡くなつたらしいと聞いた。死後2日目、レッスンを受けていた研究生たちが「変だ」と気が付き、家へ行って発見したことのようだ。病名は「高血圧心疾患」。

姜さんと話したことで心に残っていることがいくつかある。

私が訪問するのはレッスンの合間。ホールの隅にある小部屋へ行く。発表会の前に行くと、衣装にスパンコールを付ける仕事をしておられることが多い。36年前と同じだと思った。

「猪飼野セッパラム文庫」に姜さんの蔵書・資料などを譲り渡し、活用してもらえることになった時は、ほっとした嬉しそうな顔で何度も話された。

烈士の墓で写したチェ・スンヒの墓碑の大切な写真は、抱きかかえるようにして見せてもらった。

35年ぐらい前、朝鮮奨学会高校生文化祭のリハーサルで姜さんから助言をしてもらったこと。

気にしておられた在日の歴史や本国への貢献も、やっと本国教科書で取り上げられことになったことなど、姜さんと話したいことが残っている。

去年の発表会が大成功をおさめたように、四天王寺統國寺でのお通夜も葬儀も、涙があふれる悲しい式だったけれども、姜さんに伝わったように思えるお別れの式だった。(2017年1月26日記)